

教科（科目）	芸術（美術Ⅰ）	単位数	2単位	学年（コース）	1学年 （選択必修）
使用教科書	日本文教出版「高校生の美術Ⅰ」				
副教材等					

1 グラデュエーション・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

グラデュエーション・ポリシー	卒業までに次の資質・能力を育成します。 ① 自己を知り、他者を尊重する思いやりの心を育成します。 ② 自らの進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿勢を育成します。 ③ 自己の住む地域を知り、地域に貢献し、リーダーとなり得る能力を育成します。 ④ 自ら学び、自ら考え判断し行動できる力を育成します。
カリキュラム・ポリシー	資質・能力を育成するために、次のような教育活動を行います。 ① 人権教育、同和教育を計画的に、教科横断的に実施するとともに、日頃からグループ学習などで生徒同士の関わりを大切にします。 ② 多様な進路希望を実現するため、基礎学力の定着やキャリア教育の充実を図り、生徒が主体的に学ぶ進路学習に取り組みます。 ③ 地域と連携しながら、ひと・文化・産業などについて深く学び、他者と協働し発展的な思考を育てる活動を行います。 ④ 「わかる授業」の実践に努め、生徒の学習意欲向上と主体的・対話的で深い学びの実践活動を行います。

2 学習目標

美術の幅広い創作活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- （1）対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- （2）造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- （3）主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。

3 指導の重点

創造活動の喜びを味わい幅広い美術知識と技能を身に付ける。
様々な制作活動を通し豊かな感性と表現力を身に付ける。
それぞれの作品の心情に沿うために基本的な学習を身に付ける。

4 評価の観点の趣旨

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
創造的な美術を表現するために形体、色彩、構成などの知識と技能を身に付けようとしている。	感じ取ったことや考えたこと、想像などから主題を生成できるようにしている。	主題に合った表現方法を生成し、個性を生かした創造的な作品を作り上げようと取り組んでいる。

5 評価規準と評価方法

	各観点における評価方法は次のとおりです。		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価方法	上記の観点を踏まえ ・作品 ・提出物 から評価します。	上記の観点を踏まえ ・作品 ・アイデアスケッチ ・作品への取組状況 から評価します。	上記の観点を踏まえ ・作品への取組状況 から評価します。
	内容のまとめりごとに、各観点「A：十分満足できる」、「B：おおむね満足できる」、「C：努力を要する」で評価します。内容のまとめりごとの評価基準は授業で説明します。		

6 学習計画

月	単元名	教材名	学習活動（指導内容）	時間	評価方法
	オリエンテーション		年間計画や評価方法について説明	1	
4 5 6 7	鉛筆デッサン 色の仕組み 色と構成による デザイン	鉛筆 画用紙 ケント紙 定規 コンパス	・明暗の捉え方、空間の使い方、質感などを学ぶ ・色の特質について学ぶ。三原色で純色以外の全ての色をつくる。 ・テーマに沿って面を構成し、色の仕組みで学んだ知識を応用して作品に彩色する。	23	出席状況 取組状況 作品
8 9 10	レリーフ	セラミック版 彫刻刀	・モデルの手の骨格や筋肉の成り立ち、関節の動き等を観察する。	12	出席状況 取組状況 作品
11 12	レタリング	レタリング字典 ケント紙 絵の具等	・基本的な文字の種類を知り、明朝体で文字を描く。	12	出席状況 取組状況 作品
1 2 3	鑑賞 模写	教科書 B4 パネル 絵の具 教科書	・様々な作品に触れ、その時代の社会的背景を考える。また、その作家の意図も理解する。 ・美術作品から作者の作品に対する思いなどを感じ取り理解する。更に模写することにより技術や構図の取り方などを学ぶ。	2 14	出席状況 取組状況 作品

計 64 時間 (55分授業)

7 課題・提出物等

決められた期限内に作品を提出する。
作品の制作過程（アイデアスケッチ）も提出する。
完成した作品

8 担当者からの一言

同じ課題でも1人1人表現したいものが違います。その違いをお互いに認めながら、自身の持った発想に自信をもってください。また、その発想を形にするための努力をしてください。
上手下手ではなく、最後まで根気強く制作に取り組むことが大切です。